## JP07075578A

## MicroPatent Report

# DNA FRAGMENT CONTAINING GENE CODING DIHYRODIPICOLINIC ACID REDUCTASE AND UTILIZATION THEREOF

[71] Applicant: MITSUBISHI CHEM

[72] Inventors: MADORI MIWA;

KOBAYASHI MIKI; YUGAWA HIDEAKI

[21] Application No.: JP05223501

[22] Filed: 19930908

[43] Published: 19950320

ATCOLANG ASCITUCIO TOTOCADO, MARCOLOR TECTULAR ENTREGEA A CONTENTA CONCENTA CONCENTA

#### Go to Fulltext

#### [57] Abstract:

PURPOSE: To obtain the DNA fragment containing a gene coding dihydrodipicolinic acid reductase from Brevibacterium-flavum, and capable of transforming a Coryne type bacteria to produce useful products such as L-lysine, etc., in a high efficiency. CONSTITUTION: A noval DNA fragment expressed by formula, etc., containing a gene coding dihydrodipicolinic acid reductase (EC-1. 3. 1. 26), derived from a Brevibacterium-flavum [[e.g. Brevibacterium-flavum MJ-233 (FERM-BP-1497), etc.]. The enzyme is obtained as a form of an objective DNA fragment, by culturing Brevibacterium-flavum MJ-233 until the logarithmic growth phase, collecting the microbial cells, suspending them in a solution containing a lysozyme, further adding protease K and a surface active agent to subject them to bacteriolysis, collecting genes from the bacteriolytic solution by a conventional procedure, treating the genes with a restriction enzyme, and selecting a DNA coding dihydrodipicolinic acid reductase.

[51] Int'l Class: C12N01509 C12N00121 C12N01509 C12R00113 C12N00121 C12R00115



(19)日本国特許庁(JP)

## (12) 公開特許公報(A)

## (11)特許出顧公開番号 特開平7-75578

(43)公開日 平成7年(1995)3月20日

(51) Int.Cl. <sup>6</sup>	識別記号	庁内整理番号	FΙ					技術表示箇所
C12N 15/09	ZNA							
1/21		7236-4B						
// (C12N 15/09	ZNA							
•		9050-4B	C 1 2 1	1 15/ 00		ZNA	. A	
			(C 1 21	N 15/ 00		ZNA	. A	
		審查請求	•			(全 13	頁)	最終頁に続く
(21)出願番号	特顯平5-223501		(71)出數	•	1057 YC株式			<u> </u>
do and a later to the	mt -b m be (1000) o							= F48.0 E
(22)出顧日	平成5年(1993)9	月8日	(ma) Page			אנאולא	- 11	目5番2号
			(72)発明					
	•		ł					了目3番1号
			1			会社筑被	総合	研究所内
			(72)発明	者の林り	幹			
			1	茨城県	稲敷郡	阿見町中	央87	丁目3番1号
	·		ł	三菱油	化株式	会社铁池	総合	研究所内
			(72) 発明:	者 湯川	英明			
				茨城県	和敷那	阿見町中	央8-	丁目3番1号
					•	会社筑法		
			(74)代理			照鉱		6名)
			(14/14/2	/ // <del>/</del>		ма.ли	VF	O.M.

(54) 【発明の名称】 ジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含むDNA断片およびその利用

(57)【要約】

【構成】 ブレビバクテリウム・フラバムMJ-233 の染色体DNAから得られ、ジヒドロピコリン酸レダク ターゼをコードする遺伝子を含むDNA断片、該DNA 断片が導入された組換えプラスミド、および該組換えプ ラスミドにより形質転換されたコリネ型細菌。

【効果】該DNA断片が導入された組換えプラスミドにより形質転換されたコリネ型細菌を用いることで、従来よりも高効率に有用微生物産物を生産することができる。

#### 【特許請求の範囲】

【請求項1】 ブレビバクテリウム・フラバム (Brevib acterium flavum) 由来のジヒドロジピコリン酸レダクターゼ (EC 1.3.1.26) をコードする遺伝子を含むDN A断片。

【請求項2】 前記プレビバクテリウム・フラバム (<u>Br</u> evibacteriumflavum) がプレビバクテリウム・フラバム (<u>Brevibacterium flavum</u>) MJ-233である請求項1に記載のDNA断片。

#### 【請求項3】 次のDNA塩基配列:

で表されるジヒドロジピコリン酸レダクターゼ (EC 1.

【請求項4】 次のアミノ酸配列:

3.1.26) をコードする遺伝子を含むDNA断片。

Met Gly Ile Lys Val Gly Val Leu Gly Ala Lys Gly Arg Val Gly Gln 5 10 Thr Ile Val Ala Ala Val Asn Glu Ser Asp Asp Leu Glu Leu Val Ala 25 20 Glu Ile Gly Val Asp Asp Asp Leu Ser Leu Leu Val Asp Asn Gly Ala 35 40 Glu Val Val Val Asp Phe Thr Thr Pro Asn Ala Val Met Gly Asn Leu 60 Glu Phe Cys Ile Asn Asn Gly Ile Ser Ala Val Val Gly Thr Thr Gly 75 70 Phe Asp Asp Ala Arg Leu Glu Gln Val Arg Ala Trp Leu Glu Gly Lys 90 85 Asp Asn Val Gly Val Leu Ile Ala Pro Asn Phe Ala Ile Ser Ala Val 100 105 Leu Thr Met Val Phe Ser Lys Gln Ala Ala Arg Phe Phe Glu Ser Ala 120 125 Glu Val Ile Glu Leu His His Pro Asn Lys Leu Asp Ala Pro Ser Gly 135 Thr Ala Ile His Thr Ala Gln Gly Ile Ala Ala Ala Arg Lys Glu Ala 150 155 Gly Met Asp Ala Gln Pro Asp Ala Thr Glu Gln Ala Leu Glu Gly Ser 170 Arg Gly Ala Arg Leu Asp Gly Ile Pro Val His Ala Val Arg Met Ser 185 190 Gly Met Val Ala His Glu Gln Val Ile Phe Gly Thr Gln Gly Gln Thr 200 205 Leu Thr Ile Lys Gln Asp Ser Tyr Asp Arg Asn Ser Phe Ala Pro Gly

Val Leu Val Gly Val Arg Asn Ile Ala Gln His Pro Gly Leu Val Val

220

235

215

230

Gly Leu Glu His Tyr Leu Gly Leu 245

で表されるジヒドロジピコリン酸レダクターゼ (EC 1. 3.1.26) をコードする遺伝子を含むDNA断片。

【請求項5】 両末端に制限酵素HindIII認識部位

制限酵素	認識部位数						
ClaI	1						
X b a I	1						
Pst I	2						
<u>Dra</u> I	1						

【請求項6】 請求項1~5のいずれかひとつに記載の DNA断片が導入された組換えプラスミド。

【請求項7】 請求項1~5のいずれかひとつに記載の DNA断片とコリネ型細菌内で複製増殖機能を司る遺伝 子を含むDNA断片を保有する組換えブラスミド。

【請求項8】 請求項6~7のいずれかひとつに記載の 組換えブラスミドにより形質転換されたコリネ型細菌。

#### 【発明の詳細な説明】

[0001]

[0002]

【産業上の利用分野】本発明は、ジヒドロジピコリン酸レダクターゼ(EC 1.3.1.26)をコードする遺伝子を含むコリネ型細菌由来のDNA断片およびその利用に関し、より詳しくは、ジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含むブレビバクテリウム・フラバム(Brevibacterium flavum)由来のDNA断片、該DNA断片を保有する組換えプラスミド、および該プラスミドにより形質転換されたコリネ型細菌に関する。

【従来の技術】ジヒドロジピコリン酸レダクターゼ(EC 1.3.1.26) は、医薬や食品添加物として用いられるL - リジンの生合成に関与する工業的に有用な酵素であ る。ジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺 伝子としては、エシェリヒア・コリ(Escherichia coli) 由来の遺伝子 (J. Biol. Chem., 259, 14829-14834, 19 88参照)、およびコリネバクテリウム・グルタミカム(Co rynebacterium glutamicum) 由来の遺伝子 (Mol. Gene r. Genet., 220, 478-480, 1990 参照) についての報告 例はあるものの、本発明者らの知る限りでは、産業上重 要な微生物であるプレビバクテリウム・フラバム(Brev ibacterium flavum) 由来のジヒドロジピコリン酸レダ クターゼをコードする遺伝子についての報告例は見当た らない。一方、従来提案されている微生物を用いるL-リジンの製造法では、Lーリジンの蓄積等に限界があ り、新たな観点から遺伝子工学的手法による苗株の改良 も含め、Lーリジンをより効率的に生成させる方法の提

[0003]

供が強く求められている。

【発明が解決しようとする課題】本発明の目的は、コリネ型細菌に属するプレビバクテリウム・フラバム (Brev ibacterium flavum) 由来のジヒドロジピコリン酸レダ

を有し、下記の制限酵素で切断した場合に、下記の認識 部位数と切断断片の大きさを示す請求項2に記載のDN A断片:

切断断片の大きさ(kb)

0.7, 2.8

1.5, 2.0

0.25, 0.5, 2.75

1.2, 2.3

クターゼをコードする遺伝子を単離し、該遺伝子を同種 であるコリネ型細菌に導入し、該コリネ型細菌を用いて 新たな観点から効率的にLーリジンを製造することであ る。

[0004]

【課題を解決するための手段】本発明者らは上記目的を達成すべく鋭意研究を行った結果、コリネ型細菌染色体からジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含むDNA断片を単離し、該DNA断片を適当なベクタープラスミドに導入してコリネ型細菌を形質転換し、該形質転換されたコリネ型細菌がLーリジンの中間体であるテトラヒドロジピコリン酸の高生産能力を有することを見いだし、本発明を完成するに至った。即ち本発明は、(1) ブレビバクテリウム・フラバム(Brevibacterium flavum)由来のジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含むDNA断片、(2)

該DNA断片を保有する組換えプラスミド、(3) 該組換えプラスミドにより形質転換されたコリネ型細菌、を提供するものである。本発明の上記DNA断片を用いることにより、コリネ型細菌内でジヒドロジピコリン酸レダクターゼを高生産し得るベクタープラスミドを造成することができ、このベクタープラスミドでコリを型細菌を形質転換することにより、リジン生合成経路の中間体であるテトラヒドロジピコリン酸の高産生能力を有するコリネ型細菌を育種することが可能である。かくして育種されたコリネ型細菌を用いてレーリジンを効率的に製造することができる。以下に、本発明についてさらに詳細に説明する。

[0005]

【本発明の具体的説明】本発明の、ジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含むDNA断片(以下これを「A断片」と略称することがある。)とは、ジヒドロジピコリン酸を還元して、テトラヒドロジピコリン酸を合成する酵素、即ちジヒドロジピコリン酸レダクターゼ(EC 1.3.1.26)をコードする遺伝子DNA断片を意味する。

【0006】本発明のジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含むDNA断片はその塩基配列が決定された後においては合成することも可能であるが、通常は該酵素を生産する微生物から単離およびクロ

ーニングして取得可能であり、その供給源となる微生物 としてはコリネ型細菌、特にプレビバクテリウム・フラ バム (Brebibacterium flavum) MJ-233 (FERM BP -1497) およびその由来株が好適に用いられる。これら 供給源微生物からA断片を調製するための基本的操作の 1 例を以下に示す。A断片は、上記コリネ型細菌、例え ばプレビバクテリウム・フラバムM J-233 (FERM B P-1497) 株の染色体DNA上に存在し、その染色体DN Aを適当な制限酵素で切断し、生じる切断断片の中から 分離、取得することができる。まず、プレビバクテリウ ム・フラバムMJ-233株の培養物から常法により染 色体DNAを抽出し、該染色体DNAを適当な制限酵 素、例えばHindIIIを用いて完全分解する。次に得 られたDNA断片を、適当なマーカー遺伝子を有するべ クタープラスミド、例えばカナマイシン耐性遺伝子を有 するpHSG298(宝酒造製)に常法により挿入す る。得られたベクタープラスミドを用い、通常の形質転 換法、例えば塩化カルシウム法または電気パルス法等に より適当な宿主細菌、例えばジヒドロジピコリン酸レダ クターゼ遺伝子が欠損した大腸菌(エシエリヒア・コ リ) 変異株CGSC4549 [エシエリヒア・コリ ジ ェネテック・ストック・センター (Escherichia coli G enetic Stock Center)、デパートメント・オブ・バイオ

ロジー、エール・ユニバーシィティ (Department of Bi ology, Yale University): P.O.Box 6666 New-Haven, GT 06511-74, USA 保存菌株] を形質転換し、菌体を選 択培地上で培養して形質転換株の有する組換えプラスミ ドのマーカー遺伝子発現の有無により、形質転換株を分 離、取得する。得られた形質転換株より、プラスミドD NAを常法、例えばアルカリーSDS法等により抽出 し、適当な制限酵素で切断する。得られたDNA断片を 常法、例えばポリアクリルアミド電気泳動法等により解 析することにより、前記プラスミドDNAに挿入された ブレビバクテリウム・フラバムMJ-233株由来のA 断片を確認および取得することができる。

【0007】上記手法により得られるA断片の例として は、上記プレビバクテリウム・フラバムMJ-233の 染色体DNAを制限酵素HindIIIにより完全分解し て得られる、大きさ約3.5 k b の D N A 断片を挙げる ことができる。このジヒドロジピコリン酸レダクターゼ をコードする遺伝子を含む大きさが約3.5 k bのDN A断片を各種制限酵素により切断した際の、制限酵素認 識部位数および切断断片の大きさを下記表1に示す。

100081

【表 1 】

-	制限酵素	認識部位数	切断断片の大きさ(kb)
_	Clal	1	0.7, 2.8
	Xba [	1	1.5, 2.0
	Pst [	2	0.25, 0.5, 2.75
	Dral	1	1.2, 2.3

【0009】なお、本明細書において、制限酵素による 「認識部位数」は、DNA断片またはプラスミドを、制 限酵素の存在下で完全分解し、それらの分解物をそれ自 体既知の方法に従い1%アガロースゲル電気泳動および 4%ポリアクリルアミドゲル電気泳動に供し、分離可能 な断片の数から決定した値を採用した。また、「切断断 片の大きさ」及びプラスミドの大きさは、アガロースゲ ル電気泳動を用いる場合には、エシエリヒア・コリのラ ムダファージ (1 phage) のDNAを制限酵素HindI IIで切断して得られる分子量既知のDNA断片の同一ア ガロースゲル上での泳動距離で描かれる標準線に基づ き、また、ポリアクリルアミドゲル電気泳動を用いる場 合には、エシエリヒア・コリのファイ・エックス174 ファージ (φx174 phage) のDNAを制限酵素Ha e IIIで切断して得られる分子量既知のDNA断片の同 ーポリアクリルアミドゲル上での泳動距離で描かれる標 連線に基づき、切断DNA断片またはプラスミドの各D

NA断片の大きさを算出する。プラスミドの大きさは、 切断断片それぞれの大きさを加算して求める。なお、各 DNA断片の大きさの決定において、1kb以上の断片 の大きさついては、1%アガロースゲル電気泳動によっ て得られる結果を採用し、約0.1 k b から1 k b 未満 の断片の大きさについては4%ポリアクリルアミドゲル 電気泳動によって得られる結果を採用した。

【0010】一方、上記したプレビバクテリウム・フラ バムMJ-233の染色体DNAを制限酵素HindII Iによって切断することにより得られる大きさが約3.5 kbのDNA断片については、その塩基配列をプラスミ ドpUC118またはpUC119 (宝酒造)を用いる ジデオキシヌクレオチド酵素法 (dideoxy chaintermina tion method, Sanger, F. 5, Proc. Natl. Acad. Sci. USA, 74, p5463, 1977) により決定することができる。 このようにして決定した上記大きさが約3.5 k b のD NA断片の塩基配列中のオープン・リーディング・フレ

ーム (ORF) の存在から決定したジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子は、249個のアミノ酸をコードする747塩基対から構成されている。その塩基配列を後配配列表の配列番号:1に示す。

【0011】配列番号:1に示される塩基配列を包含し てなる本発明のジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコ ードする遺伝子を含むDNA断片は、天然のコリネ型細 菌染色体DNAから単離されたもののみならず、通常用 いられるDNA合成装置、例えばアプライド・バイオシ ステムズ社製394型を用いて合成されたものであって もよい。また、配列番号:1に示される塩基配列を包含 してなる本発明のDNA断片は、ジヒドロジピコリン酸 レダクターゼをコードする機能を実質的に損なうことが ない限り、塩基配列の一部の塩基が他の塩基で置換され ていてもよく、あるいは新たに塩基が挿入されていても よく、また一部の塩基が欠損または転位していてもよ く、これら誘導体のいずれもが、本発明のジヒドロジピ コリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含むDNA 断片に包含されるものである。以上に詳述したジヒドロ ジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含む大 きさ約3.5 k b の D N A 断片の各種制限酵素による切 断点地図を図1に示す。

【0012】本発明のジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含むDNA断片(A断片)を適当なプラスミドベクター、例えば、コリネ型細菌内でプラスミドの複製増殖機能を司る遺伝子を少なくとも保有するプラスミドベクターに導入することにより、コリネ型細菌内でジヒドロジピコリン酸レダクターゼを高発現する優れた組換えプラスミドを得ることができる。

【0013】また、本発明のジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を発現させるためのプロモーターは、コリネ型細菌が保有する該遺伝子自身のプロモーターのみならず、コリネ型細菌内でジヒドロジピコリン酸レダクターゼ遺伝子の転写を開始させ得るプロモーターであれば、原核生物に由来する天然または合成塩基配列であってもよい。

【0014】本発明のA断片を導入することができ、コリネ型細菌内でプラスミドの複製増殖機能を司る遺伝子を少なくとも保有するプラスミドベクターとしては、例えば、プラスミドpCRY3に、pCRY2KE、pCRY2KX、pCRY31、pCRY2KE、pCRY2KX、pCRY31、pCRY3KEおよびpCRY3KX(特開平2-276579号公報);プラスミドpCRY2およびpCRY3KX(特開平2-276579号公報);プラスミドpCRY2およびpCRY3(特開平1-191686号公報);プラスミドpAM330(特開昭58-67679号公報);プラスミドpHM1519(特開昭58-77895号公報);プラスミドpAJ655、pAJ611およびpAJ1844(特開昭58-192900号公報);プラスミドpCG1(特開昭57-134500号公報);プラスミドpCG2(特開昭58

-35197号公報);プラスミドpCG4およびpCG11 (特開昭57-183799号公報)等のプラスミドを例示することができる。これらの中でも、コリネ型細菌内でプラスミドの安定化機能を司る遺伝子を含むDNA領域およびコリネ型細菌内で複製増殖機能を司る遺伝子を含むDNA領域を保有するプラスミドが好ましく、例えば、プラスミドpCRY30、pCRY21、pCRY2KE、pCRY3KX等が好適に用いられる。

【0015】上記プラスミドベクターpCRY30を調製する方法の1例を以下に示す。プレビバクテリウム・スタチオニス(Brevibacterium stationis)IF012144(FERM BP-2515)からプラスミドpBY503(特開平1~95785号公報)DNAを常法により抽出し、これを制限酵素XhoIで処理して、プラスミド複製増殖機能を司る遺伝子を含む大きさが約4.0kbのDNA断片を切り出す。同様にして該プラスミドDNAを制限酵素EcoRIおよびKpnIで処理して、プラスミド安定化機能を司る遺伝子を含む大きさが約2.1kbのDNA断片を切り出す。得られた2つのDNA断片をプラスミドpHSG298(宝酒造製)のEcoRI-KpnI部位およびSalI部位にそれぞれ組込むことにより、プラスミドpCRY30を調製することができる。

【0016】次に、上記プラスミドベクターへの本発明 のA断片の導入は、例えば、プラスミドベクター中に1 箇所だけ存在する制限酵素部位を該制限酵素で開裂し、 そこに前記A断片および開裂したプラスミドベクターを 必要に応じてS1ヌクレアーゼで処理して平滑末端とす るか、または適当なアダプターDNAの存在下にDNA リガーゼ処理で連結させることにより行うことができ る。プラスミドpCRY30への本発明のA断片の導入 は、プラスミドpCRY30を制限酵素BamHlで開 裂させ、そこに前記ジヒドロジピコリン酸レダクターゼ をコードする遺伝子を含むDNA断片(A断片)をDN Aリガーゼで連結させることにより行うことができる。 【0017】かくして造成される本発明のA断片をプラ スミドpCRY30に導入した組換えプラスミドは、ジ ヒドロジピコリン酸レダクターゼの高産生能力を有して おりLーリジンの製造に好適に利用することができる。 本発明者らは、このプラスミドを"プラスミドpCRY 30-dapB"と命名した。本プラスミドpCRY3 0-dapBの作製方法については、後記実施例2にて 詳細に説明する。上記手法により造成される本発明のジ ヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を 含むコリネ型細菌内で複製増殖可能なプラスミドを宿主 微生物に導入し、該微生物を形質転換して得られる形質 転換微生物を用いてLーリジンを安定して効率良く生産 することができる。

【0018】本発明による上記組換えブラスミドで形質 転換しうる宿主微生物としては、コリネ型細菌、例え ば、ブレビバクテリウム・フラバムM J -233 (FERM BP-1497)、ブレビバクテリウム・フラバムM J 233 -AB-41 (FERM BP-1498)、ブレビバクテリウム・フラバムM J 233-ABD-1 (FERM BP-1500)、ブレビバクテリウム・フラバムM J 233-ABD-2 1 (FERM BP-1499) 等が挙げられる。なお、上記 FERM BP-1498 の菌株は FERM BP-1497 の菌株を規株としてD  $L-\alpha-r$  < ノ 所蔵 耐性を積極的に付与されたエタノール資化性微生物である(特公昭59-28398号公報参照)。また、FERM BP-1500 の菌株は FERM BP-1497 の菌株を規株とした $L-\alpha-r$  < ノ 所蔵 BP-1497 の菌株を規株とした $L-\alpha-r$  < ク 内蔵 BP-1497 の菌株を規様とした $L-\alpha-r$  < ク 内蔵 BP-1497 の菌株を規様とした $L-\alpha-r$  < ク 内蔵 BP-1497 の菌株を利益 BP-1497 の菌 BP-

【0019】上記微生物の他に、ブレビバクテリウム・ アンモニアゲネス (Brevibacteriumammoniagenes) ATCC 6871、同 ATCC 13745、同 ATCC 13746、プレビバクテ リウム・デバリカム (Brevibacterium divaricatum) AT CC 4020、プレビバクテリウム・ラクトファーメンタム (Brevibacterium lactofermentum) ATCC 13869, = 1 ネバクテリウム・グルタミカム (Corynebacterium glut amicum) ATCC 31830等を宿主微生物として用いることも できる。なお、宿主としてブレビバクテリウム・フラバ ムMJ-233由来の菌株を用いる場合、本菌株の保有 するプラスミドpBY502 (特開昭63-36787号公報参 **照)のために形質転換が困難な場合があるので、そのよ** うな場合には、本菌株よりプラスミドpBY502を除 去することが望ましい。プラスミドpBY502を除去 する方法としては、例えば、継代培養を繰り返すことに より自然に欠落させることも可能であるし、人為的に除 去することも可能である [Bacteriologi-cal Review, 3 <u>6</u>, 361, 1972 参照]。上記プラスミドp B Y 5 O 2 を人 為的に除去する方法の1例を以下に示す。

【0020】宿主菌ブレビバクテリウム・フラバムMJ-233の生育を不完全に阻害する濃度、例えば0.2~50 μg/ml 濃度のアクリジンオレンジもしくはエチジウムブロミド等を含有する培地に1m1当たり約10菌体の密度で該宿主菌を植菌し、その生育を不完全に阻害しながら約35℃で約24時間培養する。この培養液を希釈して寒天培地に塗布し、約35℃で約2日間培養する。得られたコロニーから各々独立にブラスミド抽出操作を行ない、プラスミドpBY502が除去されている株を選抜する。この一連の操作により、ブラスミドpBY502が除去されたブレビバクテリウム・フラバムMJ-233由来株が得られる。

【0021】上記コリネ型細菌への前記組換えプラスミドの形質転換法としては、エシエリヒア・コリ( $\underline{E}$ . coli)およびエルビニア・カロトボラ( $\underline{E}$ rwinia carotovora)について知られているように [N.M. Calvin および P.C.

Hanawalt, J. Bacteriology, <u>170</u>, 2796, 1988; K. Ito 5、Agricultural and Biological Chemistry, <u>52</u>, 293, 1988 参照]、DNA受容菌にパルス波を通電する方法 [Y. Satoh ら, J. Industrial Microbiology, <u>5</u>, 159, 1 990] 等を利用することができる。

【0022】上記の方法で形質転換して得られるジヒドロジピコリン酸レダクターゼ高産生能を有するコリネ型細菌、例えばブレビバクテリウム・フラバムMJ-233に由来する形質転換株の培養方法を、以下に述べる。得られた形質転換コリネ型細菌は、炭素源、窒素源、無機非金属または金属塩、ビタミン類等、該細菌の増殖に必要かつ十分な栄養成分を含有する培地を用いて、適当な好気、温度、pH条件の下に培養することができる。培地に含有される栄養成分は、培養の開始時に全て添加することもできるし、また培養の進展に伴い逐次または連続的に添加することもできる。

【0023】培地中の炭素源としては、例えば、グルコース、グリセロール、フルクトース、シュクロース、マルトース、競粉加水分解物、糖蜜等の炭水化物;コハク酸、フマル酸、酢酸、乳酸等の有機酸;エタノール、メタノール等のアルコール類の中から培養対象細菌が資化可能な炭素源を選択して、単独でまたは組合わせて用いることができる。培養開始時の炭素源濃度は1~5容量%であることが好ましく、さらに好ましくは2~3容量%であることが好ましく、さらに好ましくは2~3容量%である。窒素源としては、例えば、アンモニアムーの各種無力がである。窒素源としては、例えば、アンモニウム、脱酸アンモニウム、硫酸アンモニウム、炭酸アンモニウム、耐酸アンモニウム、酢酸アンモニウム、酢酸アンモニウム等の各種無機名。素化合物;グルタミン酸等のアミノ酸類;ペプトン、肉エキス、酵母エキス、カゼミノ酸、コーンスチーブリカー等の含窒素天然栄養源等を用いることができる。

【0024】無機非金属塩または金属塩としては、リン 酸一水素カリウム、リン酸二水素カリウム、硫酸アンモ ニウム、硫酸第一鉄、塩化マグネシウム、硫酸マグネシ ウム、塩化マンガン、硫酸マンガン等を用いることがで きる。ピタミン類としてはピオチン、チアミンなどを必 要に応じて用いるが、含窒素天然栄養源の中にはこれら のビタミン類を含有するものがあるので、これをもって ビタミン類の代替とすることも可能である。培養は通 常、振盪培養、通気攪拌培養等の好気条件下で行なう。 培養温度は一般に約20~40℃、好ましくは約25~ **35℃に、培地のpHは5~10、好ましくは7~8の** 中性付近に、それぞれ維持することが好ましい。培地の pH調整は、適当な酸またはアルカリを添加して行うこ とができる。培養期間は通常1~7日間とすることがで きる。培養菌体は、培養終了後に遠心分離、膜分離等の 適当な手段で培養液から分離回収することができる。

【0025】上記手法で得られる培養物または培養物から得られる菌株を用いて発酵法または酵素法によりしーリジンを製造することができる。次に実施例により本発

明をさらに具体的に説明する。当然ながら、下配実施例 は本発明について具体的な認識を得る一助としてのみ挙 げたものであり、本発明の範囲を何ら限定するものでは ない。

[0026]

#### 【実施例】

#### 実施例 1

ジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含むプレビバクテリウム・フラバムMJ-233由来のDNA断片(A断片)のクローン化

(A) プレビバクテリウム・フラバムM J - 2 3 3 の全 DNAの抽出

半合成培地A培地 [組成:尿素 2g、硫酸アンモニウ ム 7g、リン酸一カリウム 0.5g、リン酸ニカリウ 4 0.5g, MgSO<sub>4</sub> · 7H<sub>2</sub>O 0.5g, MnSO<sub>4</sub> ·4~6H<sub>2</sub>O 6mg, FeSO<sub>4</sub>·7H<sub>2</sub>O 6mg, 酵母エキス2.5g、カザミノ酸 5g、ビオチン 20 Ομg、塩酸チアミン 100μg、グルコース 20g を蒸留水に溶解して11とする] 11を用いてブレビバ クテリウム・フラバムM J - 2 3 3 (FERM BP-1497) を 対数増殖期後期まで培養し、培養菌体を回収した。得ら れた菌体を、リゾチームを10 mg/ml の濃度で含有す る溶液 [組成: 10mM NaCl、20mM トリス緩 衝液 (pH8.0)、1mM EDTA・2Na]15ml に懸濁した。続いて最終濃度100 μg/ml 量のプロテ ナーゼKを添加し、37℃で1時間インキュベートし た。さらに最終濃度0.5%量のドデシル硫酸ナトリウ ムを添加し、50℃で6時間インキュベートして溶菌し た。この溶菌液に、等量のフェノール/クロロホルム溶 液 (1:1, v/v) を添加し、室温で10分間穏やかに 振盪した後、全量を10~12℃で20分間、5,00 0×gの遠心分離にかけ、その上清画分を分取した。酢 酸ナトリウムをその最終濃度が0.3Mとなるように該 画分に添加し、次いで2倍量のエタノールを穏やかに添 加した。水層とエタノール層との間に存在するDNAを ガラス棒で搦め取り、これを70%エタノールで洗浄し た後に風乾した。得られたDNAは、溶液 [組成:10 mM トリス緩衝液 (pH7.5)、1mMEDTA・2 Na] 5mlを添加して4℃で一晩静置した後、実験に 供した。

【0027】 (B) ジヒドロジピコリン酸レダクターゼ をコードする遺伝子を含む組換えプラスミドの創製およ び選抜

前記(A)項で得られたプレビバクテリウム・フラバム MJ-2330全DNA溶液  $90\mu$ 1を、50 unit の制限酵素Hin dIIIと37℃で1時間反応させて完全分解した。また、カナマイシン耐性遺伝子を有するクローニングベクターpHSG298(宝酒造製)を制限酵素Hin dIIIで分解した後、その分解物を脱リン酸化した。得られたそれぞれのDNA分解物溶液を65℃

で10分間加熱して制限酵素を失活させた後に混合し、 該液に、それぞれの最終濃度が50 mM トリス般衝液 (p H 7.6)、10 mMジチオスレイトール、1 mM ATP、10 mM Mg C  $1_2$ 、およびT 4 DNAリガーゼ 1 unit となるように各成分を添加し、4  $\mathbb C$  で 15 時間反応させて、DNAを結合させた。

【0028】上記手順により得られたプラスミド混液を 用い、塩化カルシウム法 [J. Mol. Biol., 53, 159 (197 0)] により前記ジヒドロジピコリン酸レダクターゼ欠損 大腸菌変異株、エシエリヒア・コリ (Escherichia col i) CGSG4549 (dapB) [() 内はジヒドロジ ピコリン酸レダクターゼ遺伝子型を示す]を形質転換し た。形質転換した前記エシエリヒア・コリCGSG45 49 (dapB) 株を、カナマイシン 50mgを含有 する選択培地 [組成; K<sub>2</sub>HPO<sub>4</sub> 7g、KH<sub>2</sub>PO<sub>4</sub>2  $g \cdot (NH_4)_2 SO_4 1 g \cdot Mg SO_4 \cdot 7H_2O 0.1$ g、グルコース 20gおよび寒天 16gを蒸留水 1 1に溶解する] に塗抹した。この培地上に生育したジヒ ドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含 むプラスミドを保持する菌株を、常法により液体培養し て培養液よりプラスミドDNAを抽出した。抽出したプ ラスミドを制限酵素により分解し、得られた分解物をア ガロースゲル電気泳動に供して解析した結果、プラスミ ドpHSG298の大きさ2.7kbのDNA断片に加 えて、大きさ約3.5kbの挿入DNA断片が認められ た。本発明者らは、このプラスミドを"プラスミドゥH SG298-dapB"と命名した。

-【0029】 (C) ジヒドロジピコリン酸レダクターゼ をコードする遺伝子を含むDNA斯片 (A断片) のサブ クローニング

前記 (B) で得られたプラスミドpHSG298-dapBに含まれる挿入DNA断片を下記手順にてプラスミドpUC118(宝酒造製)にサブクローニングした。前記プラスミドpHSG298-dapBを制限酵素<u>Hin</u>dIIIと反応させて言えられる分解物と、プイラスミドpUC118を制限酵素<u>Hin</u>dIIIと反応させて得られる分解物とを混合した。この混合液を65で10分間加熱して酵素を失活させた後に、それぞれの最終濃度が 50 mM トリス緩衝液 (pH7.6)、10 mM ジチオスレイトール、1 mM ATP、10 mM Mg  $C1_2$ 、および10 mM 10 mM 10

【0030】得られたプラスミド混液を用いて、塩化カルシウム法(J. Mol. Bio., 53, 159, 1970) により前記エシエリヒア・コリCGSG4345株を形質転換し、カナマイシンを50mg含有する選択培地 [組成: K<sub>2</sub>HPO<sub>4</sub>7g、KH<sub>2</sub>PO<sub>4</sub>2g、(KH<sub>4</sub>)<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>1g、MgSO<sub>4</sub>・7H<sub>2</sub>O 0.1g、グルコース 20gおよび寒天 16gを蒸留水に溶解して11とする] に

登妹した。この培地上に生育した菌株を常法により液体 培養し、該培養液から常法によりプラスミドDNAを抽 出した。抽出したプラスミドを制限酵素により分解し、 得られた分解物をアガロースゲル電気泳動に供した結 果、プラスミドpUC118の大きさ約3.2 k b の D N A 断片に加え、大きさ約3.5 k b の挿入DNA 断片 が認められた。確認された大きさ約3.5 k b の挿入D N A 断片を各種の制限酵素で切断したときの制限酵素認 職部位数および切断断片の大きさは前記表1に示したと同一であった。このDNA断片の制限酵素切断点地図を図1に示す。また、上記手法により得られたプラスミドを各種制限酵素で切断したときの制限酵素認識部位数および切断断片の大きさを下記表2に示す。

【0031】

#### 表 2

### プラスミドpUC118-dapB

制限酵素	認識部位数	切断断片の大きさ(kb)
Clal	1	6.7
<u>Xba</u> l	2	1.5.5.2
<u>Pst</u> [	3	0.5, 2.75, 3.45

#### 【0033】実施例2

ジヒドロジピコリン酸レダクターゼをユードする遺伝子 のDNA塩基配列の決定

実施例1(C)項で得たジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含む大きさ約3.5 k b のDNA断片の塩基配列を、プラスミドpUC118またはpUC119を用いるジデオキシヌクレオチド酵素法(dideoxy chaintermination 法)により、図2に示した戦略図に従って決定した。得られた塩基配列中のオープン・リーディング・フレームの存在からジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子は後配配列表の配列番号:1に示す塩基配列を有する249個のアミノ酸をコードする747塩基対より構成されていることが判明した。

#### 【0034】実施例3

プラスミドpCRY30-dapBの調製およびコリネ 型細菌への導入

(A) プラスミドpCRY30-dapBの調製 実施例1 (B) で得られたプラスミドpHSG298-dapB 5µgを、各々 5 units の制限酵素Xba IおよびDralと、37℃で1時間反応させて分解 し、そのDNA分解物の末端部位を常法により処理して 平滑末端とした。このDNA分解物とBamHIリンカ ー(宝酒造製) 1µgとを混合した。混合液を65℃

、て酵素を失活させた後に、それぞれの 最終濃度が50mM トリス緩衝液 (pH7.6)、10 mM ジチオスレイトール、1mMATP、10mM M gClo、およびT4DNAリガーゼ 1 unit となるよ うに各成分を添加し、12℃で15時間反応させて結合 させた。得られた連結DNAを制限酵素BamHI3 u nits と37℃で1時間反応させて得られたDNA分解 物と、特開平3-210184号公報に記載の方法に基いて調製 したプラスミドpCRY30 1μgを制限酵素Bam HI 1 unit と37℃で1時間反応させて得られたDN A分解物とを混合し、この混合液を65℃で10分間加 熱して酵素を失活させた後に、それぞれの最終濃度が 50mM トリス観衝液 (pH7.6)、10mM ジチオ スレイトール、1mM ATP、10mMMgCl<sub>2</sub>、お よびT4DNAリガーゼ 1 unit となるように各成分 を添加し、12℃で15時間反応させて、DNA分解物 を結合させた。

【0035】得られたプラスミド混液を用いて、前記実施例1 (B) に記載の常法により、前記エシェリヒア・コリCGSG4549株を形質転換し、カナマイシンを $50\mu g/ml$  の濃度で含有する選択培地 [組成: $K_2HPO_4$ 7g、 $KH_2PO_4$ 2g、 $(NH_4)_2SO_4$ 1g、 $MgSO_4\cdot 7H_2O$ 0.1g、グルコース 20gおよび寒天 16gを蒸留水に溶解して11とする] に塗抹した。この培地上に生育した菌株を常法により液体培養し、該培養液から常法によりプラスミドDNAを抽出した。 由出したプラスミドを制限酵素により分解し、得られた分解物をアガロースゲル電気泳動に供した結果、プラスミドpCRY30の大きさ約8.6kbのDNA断片に加え、大きさ約800bpの挿入DNA断片が認め

られた。

#### 【0036】 <u>(B) プラスミドpCRY30-dapB</u> のコリネ型細菌への導入

上記の如く調整されたプラスミドDNAを、電気パルス 法を用いて次のとおりコリネ型細菌へ形質転換した。プレビバクテリウム・フラバムMJー233 (FERM BP-14 97) プラスミド除去株を100m1の前記A培地で対数増殖期初期まで培養した後、ペニシリンGを1unit/m1となるように添加してさらに2時間振盪培養した。培養菌体を遠心分離にて集め、20m1のパルス用溶液 [組成:272mMシュークロース、7mM KH $_2$ P $O_4$ 、1mM MgC $1_2$ ; pH7.4] にて洗浄した。再度、遠心分離にて菌体を集め、5m1のパルス用溶液に

懸濁し、0.75m1の細胞と前記(A)で得られたプラスミド溶液 $50\mu1$ とを混合し、氷中にて20分間静置した。ジーンパルサー(バイオラド社製)を用いて、2500ボルト、 $25\mu$ FDに設定し、パルスを印加後氷中に20分間静置した。全量を3m1の前記A培地に移し、30℃にて1時間培養した後、カナマイシン  $15\mu$ g/ml(最終濃度)を含む前記A寒天培地に植菌して30℃で $2\sim3$ 日間培養した。出現したカナマイシン耐性株より、常法によりプラスミドを得た。このプラスミドを各種制限酵素で切断し、得られた切断断片の大きさを測定した。その結果を下記表3に示す。

【0037】 【表3】

#### 表 3

#### プラスミドpCRY30-dapB

制限酵素	認識部位数	切断断片の大きさ(kb)						
<u>Bam</u> H I	2	0.8, 8.6						
<u>Eco</u> RI	1	9.4						
<u>Kpn</u> [	1	9.4						
<u>Xba</u> l	1	9.4						

【0038】上記表3に示した制限酵素の切断所片により特徴付けられるプラスミドを、"プラスミドpCRY30ーdapB"、該プラスミドを保持する菌株を"プレビバクテリウム・フラバムMJ233ーdapB"とそれぞれ命名した。上記表3から明らかな如く、前記プラスミドpCRY30ーdapBを制限酵素BamHIで切断することにより、プラスミドpHSG298に由来する大きさ8.6kbのDNA断片に加えて、ジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含む大きさ約800bpのDNA断片が確認された。なお、複合プラスミドpCRY30ーdapBにより形質転換されたプレビバクテリウム・フラバムMJ233ーdapBは、茨城県つくば市東1丁目1番3号の工業技術院生命工学工業技術研究所に、平成5年8月6日付けで受託番号:FERM P-13790として寄託されている。

#### 【0039】実施例4

プラスミドpCRY30-dapBの安定性の確認 前記A培地 100mlを500ml容三角フラスコに 分注し、120℃で15分間滅菌処理した後、この培地 に実施例3で得たプレビバクテリウム・フラバムMJ2 33-dapBを補菌し、30℃で24時間の振盪培養 を行った。次いで、同様にしてA培地100mlを50 0ml容三角フラスコに分注して120℃で15分間滅 圏した揺地に、揺地1m1当たり5.0 細胞の密度で植継し、再度30℃で24時間の振盪培養を行った。培養物を遠心分離して菌体を、カナマイシンを15 μg/mlの濃度で添加した平板A培地およびカナマイシン無添加の平板A培地に一定量塗抹し、30℃で1日培養した後に、生育したコロニーの数を計測した。また、カナマイシン無添加のA培地上に生育したコロニーの菌株については、カナマイシン添加A培地上での生育の可否も調査した。その結果、カナマイシン添加A培地および無添加A培地における生育コロニー数は同数であり、さらにカナマイシン無添加A培地上に生育したコロニーの菌株は全てカナマイシン添加A培地上に生育したコロニーの菌株は全てカナマイシン添加A培地上に生育したコロニーの菌株は全てカナマイシン添加A培地上に生育したコロニーの菌株は全てカナマイシン添加A培地上に生育の能であった。これにより、本発明のプラスミドpCRY30ーdapBが高度の安定性を有することが確認された。

#### 【0040】実施例5

ジヒドロジピコリン酸レダクターゼの酵素活性測定 (A) ジヒドロジピコリン酸レダクターゼ活性測定用粗 酵素液の調製

培地 [組成: 尿素 0.4%、硫酸アンモニウム 1.4%、リン酸ーカリウム 0.05%、リン酸ニカリウム 0.05%、Mg S O<sub>4</sub>・7 H<sub>2</sub>O 0.05%、Ca C l<sub>2</sub>・2 H<sub>2</sub>O 2 p p m、Fe S O<sub>4</sub>・7 H<sub>2</sub>O 2 p p m、

MnSO<sub>4</sub>·4~6H<sub>2</sub>O 2ppm, ZnSO<sub>4</sub>·7H<sub>2</sub> O 2ppm、NaCl 2ppm、ピオチン 200μ g/1、塩酸チアミン 100μg/1、カザミノ酸 0. 1%、酵母エキス 0.1%を蒸留水に溶解] 100ml を500m1容三角フラスコに分注して滅菌(滅菌後p H7.0) した後、プレビバクテリウム・フラバムMJ 233-dapBを植菌した。次いで5g/1(最終濃 度)のグルコースを無菌的に添加し、30℃で2日間振 盪培養を行った。次に、本培養培地 [組成:グルコース 5%、硫酸アンモニウム 2.3%、リン酸ーカリウム 0.05%、リン酸二カリウム 0.05%、MgSOa・ 7H<sub>2</sub>O 0.5%, FeSO<sub>4</sub>·7H<sub>2</sub>O 20ppm, M nSO4・4~6H2O 20ppm、ピオチン 200μ g/1、塩酸チアミン 100 μ g/1、カザミノ酸0.3 %、酵母エキス 0.3%を蒸留水に溶解] 1000ml を21容通気撹拌槽に仕込み、120℃で20分間滅菌 した後、この槽に前記振盪培養により得られた培養物 20mlを添加し、回転数1000rpm、通気量1v vm、温度33℃、培地のpH7.6の培養条件下で2 4時間培養を行った。培養終了後、培養物 500ml を遠心分離にかけて培養菌体を回収した。得られた菌体 を脱塩蒸留水にて2回洗浄した後、該菌体を0.1M リ ン酸緩衝液 (pH6.8) 3~5mlに懸濁し、これを 超音波処理 (3分間単位で3回、処理温度-10℃) し て菌体を破砕した。菌体を破砕した後、破砕液を4℃で 20分間、6,000 r p mの遠心分離に供し、その上 澄画分を分取した。得られた上澄液、即ち菌体抽出液を **粗酵素液として常法に従いジヒドロジピコリン酸レダク** ターゼ活性の測定に供した(TamirH., Meth. Enzymol. 17B, 134-139, 1971) .

【0041】 <u>(B) ジヒドロジピコリン酸レダクターゼ</u> の酵素活性測定

上記 (A) で得た粗酵素液を50μ1、基質であるジヒドロジピコリン酸を0.1M、さらに2mMのニコチンアミドアデニンジヌクレオチドリン酸: 還元型 (NAD PH) またはニコチンアミドジヌクレオチド: 還元型

(NADH)を20mM トリス塩酸リン酸緩衝液に溶 解した補酵素液を800μ Ι、それぞれ0.1M リン酸 カリウム級衝液 (pH6.8) に添加してジヒドロジピ コリン酸レダクターゼ活性測定用反応液とし、これを3 0℃で数分間反応させた。ジヒドロジピコリン酸レダク ターゼが1molのジヒドロジピコリン酸を還元する際 には、補酵素であるNADPH(NADH)が1mo! 酸化されるので、還元型補酵素の減少量を測定すること によりジヒドロジピコリン酸レダクターゼの活性を測定 することができる。反応が終了した後、波長340nm における吸光度を測定してNADPHの減少量を測定し たところ、ブレビバクテリウム·フラバムM J 2 3 3 dapBから調製した粗酵素液のジヒドロジピコリン酸 レダクターゼ活性は、1.0 unit/mg であった。また、 ブレビバクテリウム・フラバムM J-233 (FERM BP-1497) を上記(A)と同一条件にて培養して粗酵素液を 調製し、その粗酵素液を上記と同一条件にて基質と反応 させてNADPHの減少量を測定した。測定の結果、ジ ヒドロジピコリン酸レダクターゼ活性は0.5 units/mg であった。

[0042]

【配列表】

配列番号:1 配列の長さ:747 配列の型:核酸 鎖の数:二本鎖 トポロジー:直鎖状

配列の種類: 染色体DNA

起源

生物名:ブレビバクテリウム フラバム

株名:MJ-233 配列の特徴

特徴を表す記号: CDS 存在位置: 1-747

特徴を決定した方法: E

配列

Glu	Phe	Cys	Ile	Asn	Asn	Gly	Ile	Ser	Ala	Val	Val	Gly	Thr	Thr	Gly	
65					70					75					80	
TTC	GAT	GAT	GCT	CGT	TTG	GAG	CAG	GTT	CGC	GCT	TGG	CTT	GAA	GGA	AAA	288
Phe	Asp	Asp	Ala	Arg	Leu	Glu	Gln	Val	Arg	Ala	Trp	Leu	Glu	Gly	Lys	
				85					90					95		
											GCT					336
Asp	Asn	Val	Gly	Val	Leu	Ile	Ala	Pro	Asn	Phe	Ala	Ile	Ser	Ala	Val	
			100					105					110			
TTG	ACC	ATG	GTC	TTT	TCC	AAG	CAG	GCT	GCC	CGC	TTC	TTC	GAA	TCA	GCT	384
Leu	Thr	Met	Val	Phe	Ser	Lys	Gln	Ala	Ala	Arg	Phe	Phe	Glu	Ser	Ala	
		115					120					125				
GAA	GTT	ATT	GAG	CTG	CAC	CAC	CCC	AAC	AAG	CTG	GAT	GCA	CCT	TCA	GGC	432
Glu	Val	He	Glu	Leu	His	His	Pro	Asn	Lys	Leu	Asp	Ala	Pro	Ser	Gly	
	130					135					140					•
ACC	GCG	ATC	CAC	ACT	GCT	CAA	GGC	ATT	GCT	GCG	GCA	CGA	AAA	GAA	GCA	480
Thr	Ala	He	His	Thr	Ala	Gln	Gly	Ile	Ala	Ala	Ala	Arg	Lys	Glu	Ala	
145					150					155					160	
											GCA					528
Gly	Met	Asp	Ala	Gln	Pro	Asp	Ala	Thr	Glu	Gln	Ala	Leu	Glu		Ser	
				165					170					175		
											GCA					576
Arg	Gly	Ala	Arg	Leu	Asp	Gly	He	Pro	Val	His	Ala	Val	Arg	Met	Ser	
			180					185					190			
GGC	ATG	GTT	GCT	CAC	GAG	CAA	GTT	ATC	TTT	GGC	ACC	CAG	GGT	CAG	ACC	624
Gly	Met	Val	Ala	His	Glu	Gln	Val	Ile	Phe	Gly	Thr		Gly	Gln	Thr	
		195					200					205				
											TCA					672
Leu		Ile	Lys	Gln	Asp		Tyr	Asp	Arg	Asn	Ser	Phe	Ala	Pro	Gly	
	210					215					220					
											CCA					720
Val	Leu	Val	Gly	Val	_	Asn	Ile	Ala	Gln		Pro	Gly	Leu	Val		
225					230					235					240	
						GGC										747
Gly	Leu	Glu	His	Tyr	Leu	Gly	Leu	Sto								
				245												

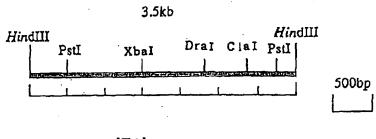
## 【図面の簡単な説明】

【図1】本発明のジヒドロジピコリン酸レダクターゼをコードする遺伝子を含む大きさ約3.5kbのDNA断片の制限酵素による切断点地図。

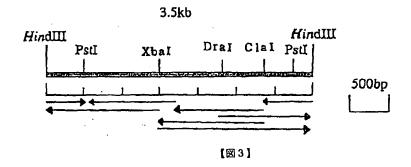
【図2】本発明のジヒドロジピコリン酸レダクターゼを

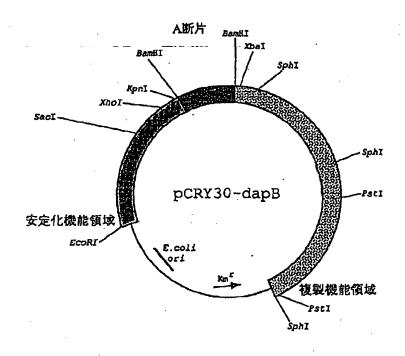
コードする遺伝子を含む大きさ約3.5kbのDNA断片の塩基配列決定のための戦略図である。

【図3】本発明のプラスミドpCRY30-dapBの制限酵素切断点地図である。



【図2】





フロントページの続き

C 1 2 R 1:13) (C 1 2 N 1/21

C 1 2 R 1:15)
C 1 2 R 1:13)